



# 阿蘇の民謡

玉井向一郎

榎本美佐江の「草泊り月夜」が、NHKの歌のランド・ショウなどで歌われて、追いついて知られてきたようだ。この歌を出すとき日本ビクターの滝井邦楽部長との間で、熊本に流行歌がないのは、いい民謡が多いせいだろうかという話が出た。

それにしても、阿蘇をもつ火のくにに新しい歌が育たないのは、ちよつと解せない。対象が巨きすぎて、詩人が気圧されるということもあるまい。濡れたロマンの方が歌にしやすいためであらうか。

今は耳にする機会を得ないが、古い阿蘇地方民謡には、なかなか洒落たものがある。

七、七、五調は、日本民謡の定型で、都々逸、正調博多節、安里屋ユンタなど、私の好きな歌にもこの調子は多い

が、阿蘇の歌から、この調子のを、幾つか拾いあげてみよう。

西が暗いは雨ではないか

雨じやござらぬよなくもり

さまの三度笠押上げてかぶれ  
すこしやお顔が見とごさる

阿蘇南部で、月の出を待ちながら、若い男女が酒宴して楽しむ風習があったそうで、そうしたときに歌われたものであろうか、「廿三夜待唄」として記録されたものに、

様はよう来たこのくらやみを

恋のたいまつとぼしてか

まくら屏風に風そよそよと

きたかと思えば南風

様の送った手拭ならば

裏や表はありやしまい

まだかまだか待つ身のつらさ

情けありあけ三夜待ち

秋の草泊りではなく、夏の朝草きり唄が、久木野地方にある。古いものだと

好いた様やんと朝草きりは

鎌はきれずにヨレヨレ草

東しや白ても夜はまだ明けぬ

拝む朝日であとひと駄

盆踊り歌は全国に多いが、草部地方のそれは、いささか泣きすぎる。

別れじやとゆてさす盃は

中は御酒やら涙やら  
親と親との御相談ならば  
行かざるまい泣く泣くも

鹿見島オハラ節と似た歌調もある南郷民謡には、

しやみの音のする太鼓の音する  
あいにや様じよの声もする

旧藩時代の南郷地方流行歌「どっこいせ節」は、

いやと思えば姿もいやよ

おぼろ月夜のかげもいや

腹がたつならあの子を見やれ

仲のよいとき出来た子ば

なかなか達者な歌が多いのだが、火山灰をまぶしつけたように泥くさい方言の歌が、記録に乏しいのは残念なことだ。

(三愛観光九州事務所長)

# 蜻蛉

三井金蔵

宇賀岳の中腹のところに何時も鼎三生と私がゆつくり遊ぶところがある。二人は永い歌友であり信実の交友を続けて来た二人はいつも散歩に出た。ここは宇賀岳の登り口で、南面の日光浴にもってこいの私達の休憩場である。一本の桜の木があつて百舌鳥、ひんこつ、等やってくる。きよはまた秋晴れの上天気二人

はそこに私は東向きに、西の方に坐わり鼎三生先生は西向きに對坐された。二人はじつとして呼吸を調整した。天人も寂静といったところである。そうしているとき可愛く中ぐらいの赤蜻蛉がきて、私の右手にとまっていたが、頭をあげて私をじつと見つめた。「この人大丈夫かしら」こんなことでも考えたのであろう。相手は小さいものながら眼をくるくるさせて、不気味な強さをもって私に迫るものを感じさせた。ややたつた、まあよからうとも思ったと見えて頭を元へかえし、じつと静かな状態で止っていた。すると、どう思ったのか一寸と飛んでこんどは左の手の先にとまっていた。こんどは向うななめむきになって、頭や手足を動かしている。私はその仕草を見て嬉しかった。二人は無言で清らかな秋の美しさをさんたんした。暫くして赤蜻蛉は飛び去った。私はいつまでもとまっていたもらいたかった。私が地蔵様であつたらなと、つくづく地蔵様が恋しくなつた。その時の歌である。

手のひらに蜻蛉とまりぬ大いなる出来  
ことの如く日記にかきぬ  
(行政管理庁行政相談委員)

〔注〕宇賀岳——松橋町と宇土市の境にある山で通称岡岳と呼ばれている。鬼の岩屋ともいうこの一帯は、岡岳古墳としてすでに松橋町の文化財に指定されている。同時に町民の憩いの場とし公園化の話が進められている。

# 今宵凋落の

## 秋を飾らむ

綴 敏子

毎年十一月になると思い出される忘れ得ぬ一つの感激がある。たしか昭和三十七年十一月三日であったと思うが、荒木精之先生の県文化功労賞受賞の祝賀会の席上であった。その日は寺本知事様をはじめ県下の知名士の方々は殆んど言っている位出席され、会場は五百人以上の方々でぎっしり埋まった。

あまり有名な方々ばかりなので誰に祝辞をお願いしようもなく、受付で渡された番号札によって、ある番号を指摘されたものがその場で祝辞を述べることとなった。私はその日は来客のため少し遅れて出席したが、はや街は暮れ易い秋の日がとつぷりと暮れ、静かな秋雨となっていた。髪も服もしめやかな雨に濡れそぼちつつ、ネオンの光がにじむように流れる舗道を会場へと急いで来たのであったが、席につく間もなく私の番号が当ってしまった。

全く面喰ってほんとにどうしようかと迷ったが、婦人の祝辞は私一人であったし指名されて述べないのも火の国女性らしくないと思ひ、また先生の輝やかしい御功績に対しても失礼だと思ひて勇気を奮って出る事にした。壇上までの間「何

も考えて来ないから極く簡単に述べたあと短歌でも詠もう。何とかまとまってくれるだろう」とのんきに構え、二十年来こよなく親しんで来たこの短詩型に唯一の望みをかけたのである。実に新鮮味のない型通りのお祝いの言葉を述べたあと即席の歌を詠んだ。

秋雨に髪もしとどに濡れにつつ君が

祝宴に吾れもつらなる

秋の夜の酒は静かに飲むべきや打ち

集い来し君が祝宴

まではお座なりの歌ながらすらすらと詠めてはつとした。これでやめておけば事なくすんだのに、お調子に乗って先生の御功績を讃えたいと第三首まで詠むこととした。後で考えて見ると大胆不敵といつかその冒険に吾れながらぞつとする。

# 冬

上田 幸法

傍聴席の後ろにたった一つの窓があった。その僅かな青空を渡り鳥の一群が人々のように飛び過ぎていった。裁判官はそれを眼鏡のなかに見送ると、襟をつと正し、おもむろに判決文を手を立ちあげた。Aこんどの書記は若い似合わず達筆であるわい。インクの色もあざやかだV

断崖のところどころに表札がぶら下っている。口をひらこうとして、思わず表札にふれてハネ返ってきた。今朝のミソ汁の匂いであった。

また窓を仰いだ。スピードをあげた孤独がヨットのようによく。あなたのように。厳しい冬の訪れのように。——静かに銃声が鳴った。

(「日附クラブ」主宰)

宵凋落の秋を飾らむ」とやつと下の句が詠めた時の嬉しさは今でも忘れられない。限りなく君が功績の輝やきて今宵凋落の秋を飾らむ

と難航した三首目の歌をしどろもどろに詠んで万雷のような拍手を浴びて壇を降りたが自席に帰ってから胸の動悸が静まらなかつた。しかし、あの満場のさ中、よくも三首の歌が詠めたものだとの夜帰ってから感激に深く神に感謝を捧げたのである。

その時の私の悲壮な様子にわれわれを催おされたのか、同情されたのかは知らないが後で荒木先生から「祝歌はどうも有難うございました」と御礼状が届き、広永校長先生からも「即席としては上出来でしたよ……」とお褒めのお便りをいただいたのには全く感激して嬉しかった。と共に自分の無謀さを深く反省したのである。思えば、斎藤茂吉程の歌人でさえも「……一首の歌にも骨が折るるなり」と嘆じているのに、たとい即興の祝歌とは言え、あまり謙虚さを欠いた試みであった。きつと神の戒めであつたらうと恥じ入った次第である。

毎年秋深くなるとかの夜の狼狽と共に「今宵凋落の秋を飾らむ」の下旬が、深い感慨をもって思い出され、自然と共にこの人生の凋落を飾るべき何ものもないわが身が顧みられてしきりに寂しいのである。

(水鏡同人)